

ワシントンへ桜を贈り、軍縮・不戦・国際協調主義を訴え続けた 尾崎行雄（号堂）生誕150周年、2008

The 150th Anniversary of the Birth of Yukio OZAKI, the Politician who Presented the Japanese Cherry Blossom Trees to Washington D.C. and Petitioned for Disarmament, Peace and, Mental Globalism

上田 邦義
UEDA Kuniyoshi

Abstract: The year 2008 is the 150th anniversary of the birth of Yukio OZAKI (1858-1954), who sent 3000 Japanese cherry saplings to Washington D.C. in 1912. Mr. OZAKI devoted his 63-year career as a Congressman in Japan to importing and establishing democracy there. During this time he also pleaded for disarmament both domestically and abroad, actively encouraged antiwar sentiment, and petitioned for mental globalization. He advocated the creation of the World Federation, an organization for maintaining world peace, until the end of his life at the age of 95. To commemorate the 150th anniversary of his birth, an event was held at the Kensei-Kinenkan (Constitution Memorial Center) in Tokyo on November 20th. The Speaker of the House of Representatives in Japan, the President of its House of Councilors, and the former Japanese prime minister Junichiro KOIZUMI all made short speeches. OZAKI's third eldest daughter, Yukika SOUMA, who had acted as his personal interpreter whenever he visited the U.S. was scheduled to speak, but unfortunately she passed away just 10 days prior to the event at the age of 96. OZAKI, who never became prime minister in Japan, was expected by politicians in the U.S. to do so after the World War II. When he died, many overseas governments lauded him as a "great statesman", and sent gifts, among which was a picture of Abraham Lincoln painted by President Eisenhower himself. This essay also discusses the characteristics of OZAKI's idea for the World Federation, which stressed as its function the prevention and arbitration of international disputes, leaving domestic issues to be settled by the governments of each individual country. Ozaki believed that international education in all countries is an essential part of overall education.

Keywords: Yukio (Gakudou) OZAKI, Potomac cherry, democracy, disarmament, antiwar, world peace, international education, "World Federation", Yukika SOUMA, Shigeaki

HINOHARA, Abraham Lincoln, Barack Obama 尾崎行雄（罌堂）、ポトマック桜、「憲政の神」、「議会政治の父」、軍縮、不戦、世界平和、国際教育、「世界連邦」、相馬雪香、「難民を助ける会」、日野原重明、エイブラハム・リンカン、バラック・オバマ

尾崎行雄とは？

尾崎行雄ときいて、ああ、あの罌堂翁かとか、ワシントンへ桜を贈った東京市長ですねとか、わかってくれる日本人が、2008年（平成20）の今日、どれくらいおられるであろうか。明治・大正・昭和と、民主主義の政治家として国際的に名を馳せた、日本が世界に誇るべき政治家である。

1933年（昭和8）3月4日号の『ニューズウィーク』（*Newsweek*, 1933年創刊）誌は、尾崎を「日本の良心」と呼び、また37年（昭和12）3月13日の『ワシントン・ポスト』（*The Washington Post*）紙は、その社説で、「尾崎はまさしくこの時代の大英雄である」と讃えた。「しかし、尾崎は高齢（78歳）の上に、党の指導者として必要な妥協をするには高潔過ぎ」とし、日本の議会における彼は、「孤独な一羽の鷹的な存在である」とした。しかし「高潔過ぎ」を、欠点と考えたわけではない。「尾崎の恐れを知らぬ勇気と、自由と民主主義のための生涯にわたる戦い」を賞賛し、「五年前、尾崎は満州事変を非難する記事を雑誌に書き、『墓標に代えて』と題した。暗殺される覚悟ができていたのである」と。

「戦争などは断じてしてはならぬ」

「世界の土地と資源は、全人類のものである。だから、日本は世界中の国々と仲良くし、たがいに助け合う方向へ進まねばならない。戦争などは断じてしてはならぬ」。『墓標に代えて』は、昭和8年（1933）、滞在中のロンドンで英語版が出、身の危険を冒して帰国した国内では、同年『改造』に発表された。

そこには彼の軍縮・不戦、そして平和への願いがつつられていた。「文明人の間では、軍勢力以外に知性や道徳心、経済力などが国を判断する基準となりつつある。将来は社会の進歩につれて、軍勢力や経済力よりも道徳心や知性がさらに注視されるようになることだろう」。

上記、昭和12年の『ワシントン・ポスト』紙は、この一文も社説に引用し、太平洋戦争前の尾崎に敬意を払っていた。そして軍縮会議にも彼が日本代表で出席するものと期待していた。

民族主義を排し、国際主義・平和主義を訴えた尾崎

戦争末期の1945年（昭和20）7・8月ごろ、東京や名古屋の上空から米軍機B29がまいたビラには、日本政府が早急に戦争を終結することを勧め、「現在の事態は、日本を破滅に導いた軍部指導者たちの採った理論が誤謬であって、尾崎氏の如き人々が正当であった事を立派に証明している。言論の自由と自由主義政府とを再び確立することが、日本の将来を保証し得る唯一の道である」とあった。（引用資料は、まとめて最後の「参考文献」に掲げる）

終始その信念とする国際主義・世界主義に基づき、軍縮と不戦論を唱え、戦時中も国内の弾圧に屈せず平和主義を訴え続けた尾崎は、国内では国賊・非国民とされ、空想家として嘲笑され、巣鴨拘置所に留置されもした。しかし米国の有力誌は、尾崎を戦後のふたりの首相候補者に挙げていたのだ。

「人民のための政治」

尾崎がついに首相になることなく1954年10月6日、95歳で永眠したとき、各国議会や元首等から、「日本の偉大な政治家尾崎」に対して多数の記念品が贈られた。その中には、アイゼンハワー (Dwight David Eisenhower, 1890-1969) 大統領自身が描いたエイブラハム・リンカン (Abraham Lincoln, 1809-65) の肖像画もあった。スウェーデンからは尾崎のことは「人生の本舞台は常に将来にあり」が刻まれた大理石が贈られた。

尾崎は国内では一度も権力の座についたことはない。逆に「実際政治家としては落第生」とまで酷評されていた。しかし海外における評価は極めて高かった。時あらば「日本のリンカン」とまで映ったのだ。

次期米大統領となるバラック・オバマ (Barack Obama) 氏がすでに選挙戦の間から、そのヨーロッパ訪問に表われたように、信じがたいほど多くの人々を魅了したのは、単に演説のうまさだけではなく、その「人民のための」政治へのゆるぎない信念の故ではなかったか。

法律の勉強はその法が制定されたときの精神を知ること

筆者はたまたま2008年6月に、二週間ほど仏英二カ国を訪問する機会があった。両国のどの空港の書店にも、オバマ氏の著書、*Dreams from My Father* と *The Audacity of Hope* がうず高く平積みされていた。

私は早速これらを買って求め、移動中電車のなかや飛行機のなかで、そしてホテルでも夢中になって読んだ。そしてわかったことのひとつは、彼がワシントンへ移る前の10年間、シカゴの大学で憲法を教えたこと。そして法律を学ぶ上でもっとも大切なことは、法律の文言ではなく、それが作られたときの精神を理解することである、とあったことである。

まさしくそれは若かりし日のリンカンが夢中になって法律を独学で勉強し、イリノイに法律事務所を開いたときと同じ姿勢ではないか。そしてそれは、尾崎が『わが遺言』(1951、昭和26年)のなかで繰り返し述べていたことでもあった。

尾崎は『帝国憲法』も優れた憲法であったのだ。ただその運用を間違えた、と。新憲法も、非常に優れたものである。しかし、「優れば優れるほど、知識道徳の低いわが国においては、実行は困難であるということ、覚悟して置かねばならぬ」と。そして、「真に天地間の正しき道理を知るものは、文字の末よりかその精神骨髓に重きを置かなければならぬ」。「文字の末に拘泥するようなことでは、真の立憲国にはならない」と警告した。

「地球上から戦争を絶滅するのだ」

尾崎のこの先見性は、国内にあつては特に近年かまびすしい改憲論議を思うとき、また国際的には彼の「世界連邦」建設提唱（これは後に論ずるつもり）と併せて、極めて現実的な警告であり、また提案でもあった。彼は、「地球上から戦争を絶滅するのだ」と訴えていたのである。

2008 年は尾崎行雄生誕 150 周年

さて、2008 年は、その尾崎行雄（1858－1954）の生誕 150 周年に当たった。それを記念して 11 月 20 日に、東京永田町の憲政記念館において「尾崎行雄生誕 150 周年記念の集い」が催された。しかし新聞・テレビは全くこれを報じなかった。少なくとも筆者の目に入ったものはひとつもない。当日、会場には報道陣は多数見えていたのであるが。

三女・相馬雪香^{ゆきか}氏の功績

ただその 10 日ほど前、尾崎の三女の相馬雪香氏が、11 月 8 日に 96 歳で亡くなられたことに関しては、簡単なオビチュアリー（死亡記事）が全国紙に掲載された。尾崎についてではなく、雪香氏についての記事である。「憲政の神」と呼ばれた尾崎行雄の三女、雪香氏（1912－1908）は、尾崎の度々の外遊に同行して通訳をつとめ、また自身は 79 年以後、「難民を助ける会」会長、その他尾崎が「ふたつのフセン」といった「不戦と普選」に関わる多くの役職をつとめ、紛争地域への物資援助、「地雷禁止国際キャンペーン」など、草の根の国際救援活動などを続けてこられた。

雪香氏のユニークな生涯や活動については、その著書『あなたは子どもに何を伝え残しますか』や、日野原重明氏との共著『明日の日本への贈り物』などに詳しい。ここではこれらの本がいかにか素晴らしい内容のものか、また彼女の生き方が、いかに今日の日本人にとって、特に母親や教師にとって示唆するところが大きいのか、私が大きな感銘と共感を持って一気に読み終えた、ということを書きとどめる。参考文献参照。

「尾崎行雄生誕 150 周年記念の集い」

さて、「尾崎行雄生誕 150 周年記念の集い」であるが、主催は財団法人、尾崎行雄記念財団であったが、その内容は政府主催の簡単な公式行事に近いもので、以下の通りである。出席者は約 500 名。多くの政治家が顔を見せた。

日時 2008 年 11 月 20 日（木）午後 6 時

会場 憲政記念館（千代田区永田町 1－1－1）

内容 主催者挨拶 河野洋平（衆議院議長、尾崎行雄記念財団会長）

森山眞弓（衆議院議員、同財団理事長）

来賓挨拶 江田五月（参議院議長）

特別講演 小泉純一郎（元内閣総理大臣）（これは挨拶に過ぎなかった）

次は相馬雪香氏のスピーチが予定されていたが、亡くなられたとの知らせと黙祷だけであった。

ビデオ「尾崎行雄」上映

諸団体への感謝状の贈呈

レセプション

祝辞 日野原重明ほか。

挨拶 原不二子（相馬雪香氏令嬢、尾崎行雄記念財団常務理事）

以上であった。

25 回連続当選、63 年の議員歴

尾崎行雄（号堂）翁の功績は、単にわが国会開設（1890 年、明治 23）以来、衆議院二十五回連続当選による 63 年の議員歴で、世界の議会史上の記録であるなどの、数値によって測られるものではない。1946 年（昭和 21）、戦後初の総選挙に、尾崎は「戦時中、その職責を全^{まっ}うしなかった」という理由で、立候補しなかった。しかし、三重号堂会が運動して、当選させてしまった、といういきさつもある。

党や派閥のためではなく国民のための政治

尾崎は若くして自由民権運動に身を投じ、保安条例（明治 20 年）により東京退去を命じられた。だが終始一貫、党派や派閥のためではなく、国民の側に立った「真の民主政治」と「世界平和」実現を願い、軍国主義が一世を支配した昭和時代も、あらゆる弾圧に屈せず、その信念を堅持し、軍縮を国内のみならず世界に訴え、晩年は「世界連邦」建設を提唱した、その高い理念と強い意志と行動力を示し続けた、そのゆるぎない方向性と持続力こそ讃えられるべきである。

尾崎のいう「国民のための政治」とは、具体的には、戦後まもなく、政権争いの国会を戒めて、「餓死する人、住む家のない人がいくらでもいる、そんな時に、内閣が良い悪いのと言うべきではない。良くっても悪くっても、力を合わせてまず餓死する者を防がねばならない」といった政治姿勢である。

憲法も運用する人間が問題

国民主権、人権尊重、平和維持が最重要であるならば、憲法の問題点も、その字句にあるのではなく、運用の仕方によるとした。そして運用する「人間」が問題であると。政治によってこれらを実現するためには、各国が民族主義ではなく世界主義に立った「国際教育」が必須であるとした。

ポトマック河畔の桜

また、日米関係では、桜の苗木三千本を贈ったことである。日露戦争の終結時に、アメリカ

の救援があってロシアとの和平が成立し、アメリカはポーツマスで講和が締結された、その好意にこたえるべく贈った桜である。

それは尾崎が東京市長（1903-12）を兼ねていた 1912 年（明治 45）のことであった。政府にその意思がないと見るや、尾崎は東京市議会に諮って返礼したのである。『ワシントン・ポスト』紙が、社説等でその後繰り返し言及した事柄である。それは三女雪香の誕生の年で、2012 年はその百周年になる。日米の親善友好を祝って、ポトマック河畔での盛大な「ポトマック桜祭り」が期待される。

尾崎の「世界連邦」構想

晩年の尾崎が構想した「世界連邦」とはどのようなものか。その特徴を、彼が 1947 年（昭和 22）12 月 11 日、わが国第八十九回臨時議会で提出した「世界連邦建設に関する決議案」から見てみよう。議会は、採択はしたものの、現実的な運びとはしなかった。

尾崎の構想は、「世界の独立国を網羅して一種の中央政府を設け、国際紛議の予防と裁決だけを担当させ、その政務は総て列国の自治に一任」（前文）というものである。

すなわち、なによりも、「国際紛議の予防と裁決だけを担当させ」、後に見るごとく、「仲裁もしくは裁判によって、悉皆の紛争と衝突を解決することこれなり」と。

そして単一の「世界国家」ではなく「世界連邦」として、構成各国の内政には不干渉とし、しかし、協調による全世界の平和の実現を目指したものである。

それは国際連盟を一步進めた構想であった。すなわち国連は、主権国家間の条約関係で結ばれた国際機構であって、それ以上のものではなかった。尾崎の構想した世界連邦は、それ以上の、国家主権の一部委譲に基づく「一種の中央政府」であったことである。ということは、尾崎に言わせれば、国連は「動物程度の有機体」にすぎず、彼はこれを進化させて、「人類程度の有機体」とすることを考えたのであった。

すなわちその理由書に、「文化の進歩するに従って殺傷破壊の器具と方法は際限なく増進す。故に現在の如き列国対立抗争の体勢を継続すれば国家及人類は遂に破滅に至るべし」「之を保存せんと欲せば国際戦闘を絶滅せしめざる可らず」とし、そのためには、「一層広汎なる政治機関を設け、仲裁もしくは裁判に因て、悉皆の紛争と衝突を解決することこれなり」というものであった。

軍縮と国際語

また「軍備の撤廃又は大縮小に依って生ずる経費を割いて、広く全世界の平和問題研究者を優遇」し、また「世界連邦建設及実行関係の手段方法を調査講究せしむべし」と提案した。

また特に注目されることは、「国際語を調査せしめ、我自ら之を採用して連邦政府の用語となす事を力むべし」という一項である。言語を変えてまでも率先して国際平和の推進者たらしめる日本国の決意を世界に示すべきと考えたことである。国際社会にあって、英語が日本人に

とて必ずしも自由自在に操りえない代物であることを考えるとき、これは種々の問題をはらんでいるが、尾崎の趣旨は十分に理解できるものであった。

戦争と犯罪

尾崎は『わが遺言』で言う。「個人間では、人を殺すことは重大犯罪である。」だが、「戦争という形で、大量殺人をやっても、ただに犯罪でないのみならず、人殺しの名人に対し、国家は名誉の勲章を与えて、これを称賛する」と。「人を殺すことは個人がやっても、国家が戦争の名によってやっても、同じように悪いことだとなぜ考えないのであろう」と。

国家の存在理由

また国家の存在理由について、「その域内に住んでいる人々の生命と財産の安全を保証し、かつ最大多数の最大幸福をはかるにある」と。

然るにその国家が「戦争を始めてあべこべに人民の生命財産を危険にさらすと、人民は自らすすんで自分の生命財産もなげ出して、国家のためだと勇み立つ。戦に敗けて最大不幸のどん底に落ちこんでも、国家がやったことだから仕方がないとあきらめる」。「なぜもう一歩前進して、いまの国家よりももっと頼りになる、安全保証の仕組みをつくりだすことを考え、かつ努力しないのであろう」と。

「世界連邦」建設は「廃藩置県」「アメリカ合衆国」建国に同じ

尾崎は、「世界連邦」建設は、日本が明治維新による統一国家建設を「廃藩置県」によっておこなったと同じという。徳川時代、三百余藩はそれぞれ一つの邦であった。それを「版籍奉還」「廃藩置県」によって、近代的統一国家が形成されたのであると。

また、アメリカ建国の歴史に言及し、「十三州は、各々ステート即ち独立的国家であったのだ。現在の四十八州中には、テリトリーとして中央政府の支配を受け来ったものが多いから、最初の十三州とは少し趣を異にするが、なお各々国家の資格を備え、独立の行政・司法・立法の三権を持っている。」「北米の殖民は連合して一個の連邦を造った」のであると。

尾崎はこれらの歴史的教訓を生かし、「世界連邦」は建設できるとする。そして、そのためには各国が、国民の意識改革を行い、国家主義・民族主義教育ではなく、世界主義・国際教育をおこなうことが必須であると。そして機会あるごとに国内外でこの持論を開陳した。

91歳での訪米

1950年(昭和25)春、尾崎は91歳の高齢であったが、三女相馬雪香氏ら四名を伴い渡米し、「桜の巨人」「日本の民主主義の父来る」と大歓迎をうけた。元駐日アメリカ大使ジョゼフ・グルー、ウィリアム・キャッスル両氏らが主宰する「日本問題審議会」(American Council on Japan)からの招待であった。

そこで尾崎は、太平洋を挟む両国は精神同盟 (Moral Alliance) を結ぶべきと挨拶し、また、第二次大戦か起きたのは、世界が三つの誤りを犯したからとした。日本が満州事変を起こしたこと。アメリカが国際連盟に入らなかったこと。イギリスが日本の満州事変やイタリアのエチオピア侵入に断固たる処置をとらなかったこと。そしてその根本は、世界各国が民族や国家を中心に国民を教育したこと。この誤りを正し、世界主義の立場をとらなければならない、と説いた。そして日米がそれぞれ過去の国家形成の経験を生かすなら、世界規模の「世界連邦」を建設して、最大多数の人々に自由を保障する社会を目指すことができる、と訴えた。

『ワシントン・ポスト』紙は二度も社説を書き、また老記者は、「アメリカ上院が、外国人に対してこれ程の好意を示したことはない」と書いた。

「都」の経営者、塚田数平

40日にわたったこの訪米を、財政的に全面支援したのは、長年ニューヨークに住んで日本料理の「都」を経営してきた塚田数平氏であった。彼は尾崎を尊敬してやまなかった。40年前に尾崎が贈ってくれた桜樹が、毎年ポトマック河畔に見事な花を咲かせるので、4月の桜祭りにぜひ招きたいと思ったのだった。しかし私人としての渡米はならず、公人として、五月中旬からの訪米となり、公務が終わって訪ねたポトマックは葉桜であった。

塚田は新潟県出身、在米 47 年。ニューヨークのフレンチ・クオーターで世界各国人に知られた「スキヤキ・テンプラ・ディナー」の「都」を経営してきた。彼はいう。

「戦時中つくづく考えたことは、日本もバカなことをやったものだということでした。もし日本に尾崎さんのような人が百人もいたらあんな戦争は起こらなかったにちがいないと。戦後日本人はたくさん来ているが、米国人の心をやわらげるような人は一人も来ていません。こんなことの出来る人は、明治時代から今日まで終始一貫戦争に反対してきた尾崎さん以外にないと考えて、三年も前から翁を米国に招待することを計画し、その一番よい時期は尾崎さんの贈ってくれた桜の咲くころと思ったのですが、おくれたのは残念でした」

その歓待を受けて、尾崎は次のような歌を詠んでいる。

- ・夢かとも思へどさめぬもてなしに我等の幸をわれは怪しむ 翁
- ・ポトマックの桜にうたひ月に酔ひ雪をめでつつわが世終えなむ 翁
- ・百年をこえて命のなおあらば月雪花に身をまかせなむ 翁

「人民のための政治」

しかし尾崎は、贅沢な食事や至れり尽くせりの歓待ぶりに「金持ちが金にあかしてこんなゼイタクをすれば、共産主義者が多くなるのは当然だ」と側近に慨嘆し、また記者団の質問に、「日本の民主主義は丸つきり駄目だ。日本人は新憲法を運用できない」。「共産主義は、主義の如何で罰すべきではなく、個々の事実によって罰すべき点があれば罰するがよい」と答えた。

尾崎はすべて英語で答え、相馬夫人が傍らからこれを補足した。

今日、尾崎の構想した「世界連邦」は実現していないが、同じ目的達成のために、世界中の多くの人々はその実現に努力している。2009年はリンカン生誕200年である。次期アメリカ大統領バラック・オバマ氏には、世界から大きな期待が寄せられている。

参考文献

- 伊佐秀雄『尾崎行雄伝』尾崎行雄伝刊行会、1951
 伊佐秀雄『尾崎行雄』吉川弘文館、1960
 大塚善一『罎堂 尾崎行雄ものがたり』つくい書房、2002
 尾崎行雄『わが遺言』国民図書刊行会、1951
 尾崎行雄『尾崎罎堂全集』尾崎罎堂全集刊行会、1962
 川越智子脚本・絵『漫画 尾崎罎堂』尾崎行雄を全国に発信する会、1994
 猿谷要『生きているリンカン』東京リンカンセンター、1971
 カール・サンドバーグ著、坂下昇訳『エブラハム・リンカーン』新潮社、1972
 鈴木有郷『アブラハム・リンカンの生涯と信仰』教文館、1985
 相馬雪香・富田信男・青木一能編著『罎堂 尾崎行雄』慶応義塾大学出版会、2000
 相馬雪香『あなたは子どもに何を伝え残しますか』祥伝社、2004
 外崎克久『ポトマックの桜―津軽の外交官珍田夫妻物語―』サイマル出版会、1994
 日野原重明・相馬雪香『明日の日本への贈り物』毎日新聞社、2003
 前田朗『軍隊のない国家 27の国々と人々』日本評論社、2008
 森山真弓・相馬雪香ほか編『尾崎行雄生誕百五十周年記念誌 罎堂―尾崎行雄の理念と歩み―』尾崎行雄記念財団、2008
 Barack Obama, *Dreams from My Father*, Canongate, 2007
 Do, *The Audacity of Hope*, Canongate, 2007
 上田邦義「美しい国の教育について」『融合文化研究』第9号、国際融合文化学会、2007

付：「国際融合文化学会」のモットー

調和と融合

「国際融合文化学会」(International Society for Harmony and Combination of Cultures, ISHCC) は、世界の文化の「調和と融合」(Harmony and Fusion) を標榜して2000年に発足した。だが、「調和と融合」は、手段・方法であって、目的ではない。その大目的は、全人類の幸福である。この大目標を達成する手段・方法として「調和と融合」もしくは「協調と融和」を掲げている。その「調和」と「融合」とは、一見類似のものに思われるが、むしろ異質のものと考えている。

「調和」と「尊重」「向上心」

「調和」は、互いに相手を認め、これを尊重しつつ自己を展開するときに生まれる。相手を無

視・軽視、あるいは従属せしめたりせず、十分に尊重する。少なくとも尊重せんとする意思・態度が必要である。したがって、その自己展開は、相手を傷つけたり犠牲にしたりすることのないよう十分な配慮がなされなければならない。そのようにして出来上がる理想的な状態が、「調和」ハーモニーである。そのためには、協調の精神が最も必要である。

これを持続し、互いに共生するには、「向上心」が必要である。なぜなら大自然の一部である人間には、植物が太陽に向かうが如く「向上心」は必然のものであり、まったくこれを欠けば、共生は不可能となる。言い換えれば、「真善美」へ向かう、人間に自然の意欲がある。それは人間性に必然のものだからである。

「融合」と「愛」

他方、「融合」は、調和が自分と相手とが異質であることを認め、その異質性を互いに尊重するのに対して、相手の同質性・異質性を問わず、意識的・無意識的に、多かれ少なかれ融和・融合・合体してしまうものである。それは敬愛の結果起こることが多い。

単に相手を尊重し、大事にする関係は、それは浅い愛もしくは博愛である。英語の I love apples. 「私はりんごが大好きです」と同じ、人間についても使う。精神的な「愛」、いわゆる「愛している」とは異なる。(但し日本語でも「愛している。君が必要なんだ」は、愛ではなくエゴである)。単に「大好き」の意味である。深い愛は、精神的融合・合体・一体化であり、この世にある限り、それが肉体的・物理的な融和一体化をももたらすことは考えられる。

「融合」にはただし、不自然な場合がありうる。一方が他方を相手の意志・感情にかかわらず融合してしまう場合である。侵略である。これは望ましいケースではない。それは自然の精神的・必然的な融合ではない。

そういうわけで、「調和」と「融合」とは異なるものであり、ともに尊重されなければならない。そしてそれが国際的になされるとき、人類は万民幸福の、理想社会への方向づけがなされると考えられる。